

# 君たちの手が創るpart1「寄木細工と気になる木」



手で創り出す喜びを伝えようと、クラフト展会期中に行われていた恒例のワークショップは、JKAの補助をいただき、親子ワークショップとして独立した形で夏・冬と2回連携して開催。時間をかけて「素材」を知り「技術」を覚え「制作」を体験することができるようになりました。

8月17日の午前10時半、参加の親子が会場の新丸ビル10階にあるエコを学ぶスペース「エコツツエリア」に揃い、夏のワークショップ君たちの手が創るシリーズのpart1「寄木細工と気になる木」は始まりました。前半は、神奈川県立生命の星・地球博物館学芸員で植物生態学がご専門の田中徳久先生のお話。地球上の植物と私たち人間の関わりに始まり、その仲間で寄木の材料でもある「木」の特徴や役割など、スライドを使いながら分かりやすく話してくださいました。世界にはなんと丈が15センチの「木」もあること。竹は木や草のどちらにも分類しにくいこと。日本は世界の平均森林率30%をはるかに超えて66%の森林を持っていること。しかし、二酸化炭素の排出率も世界でNo.4と高いことなど、驚いたり納得したり。田中先生の愉快的語り口にあちこちで笑いがあがり、リラックスした雰囲気の中のスタートでした。



田中徳久先生のお話

今回取り上げた「寄木細工」は、江戸末期にたくさんの種類の木に恵まれた箱根で生まれ、東海道の往来に支えられ木工職人が多くいた小田原にも広がっていき、今では箱根・小田原の特産品になっています。

後半は、その小田原で寄木の技法をクラフト作品に生かそうと取り組まれている、露木木工所の3代目露木清勝会員と、4代目清高さんの指導によるオリジナルコースター作り。各テーブルに回された寄木の材料になる現物の木に触ると、参加者の皆さんの目が輝き出し、表面を撫でてみたり匂いを嗅いだりと「気になる木」モード全開に！六角形のコースターに構成するために、白っぽい「水木」や少しグリーンがかった「朴」、黄色が綺麗な漆、舐めると苦いと言われたベージュの「苦木」、2000年も埋もれていた焦茶の「神代桂」、アフリカから輸入された赤茶色の「バドック」など、10種類の木から作られた8mm厚程の三角▲チップや菱形◆チップを選ぶのですが、子ども達はどの木を使おうかと真剣に色や形の組み合わせをしていました。その様子を見ていた保護者の方々も、「やってみようかしら」と制作に参加され、たくさんの作品が生まれていきました。コースターは選んだチップを接着剤で貼りあわせて完成なので、直感で組み合わせる子ども達はどんどん作業が進み、来られなかった家族の分も作るという微笑ましい場面もあちこちで見られました。当日午前と午後の2回、各2時間行われたワークショップは、どちらの回も終始和やかな中にも集中力を持って進み、指導に当たったクラフト展事業委員会のメンバーは「素材の魅力や不思議」と「創る楽しさ」を伝えられたかなと感じた有意義な一日でした。

この企画は、(財)省エネルギーセンターが毎年丸の内界隈で取り組んでいる「エコキッズ探検隊」の、工作のできるワークショップとして広く紹介されました。冬には更にバージョンアップしたワークショップ「オリジナルバッジとキラメキの木」に繋げていき、第50回日本クラフト展で成果を発表する予定です。



この事業は、競輪の補助金を受けて実施されたものです。